

第28号
Vol.10-1
2013年5月1日

Dar i Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人嬉泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 8-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-84-21-7864 E-mail: kenkn@tm.net.my



ロングボートから眺めたRajang川に沈む夕陽

撮影者 中澤 和代

悲しみ、喜び、或いは充ちた思いか、虚ろさかさえ分からない。いろいろな思いを含み込んだ感情のことを「感慨」というのだろうか。今日、2013年4月18日、こういう不思議な感情になるとは、思い描いていなかった。今から丁度20年前、思いだけを胸に、具体的な計画もなく、心細ささえ感じずに、マレーシア、ペナン島に着いた。最初の夜は、日本から予約していたホテルの一室だった。何もすることがなく、窓辺に立ちペナンの夜景を眺めた

あれから20年、今はボルネオ島で既に10年になった。嬉しいことも楽しいことも沢山あった。勿論困ったこと、辛いこともあった。嬉しくても悲しくても困っても、どの時も、いつも傍らにいてくれた友は「お酒」だった。妻は「ただの酒飲み」というのは、呑むことの他に何の取り柄もない！ということだろう。本当にその通りだと思う。お酒は、嗜む程度に程々に呑むのが良いというが、お酒と私の関係はちよつと違ふと、私は思っている。

お酒で随分人に迷惑をかけ、若い頃からは失敗を重ねてきた。未だに、呑まれるほど呑まなければ気が済まない。お酒は、特にこの20年間、私の「良き友」であった。毎日は活動があり、夜になればお酒がある。いわばコンビを組んできた。私の感慨の全てを、お酒は知っている。お酒のおかげで生きて来られた。悪友ではない。沢山の人たちへの感謝と共に、お酒にも感謝状を出したい。ただの酒飲みのために、妻は今イバン族のお酒“Tuak”を仕込んでいる。(健)

国際協力の心

NGOアジア歯科保健推進基金(AOHPF)
代表 村居 正雄



途上国で歯科検診を行う

人と人の出会いは不思議なものです。もし、2013年2月19日の朝、カピットのHotel Meligaiのロビーで中澤さんご夫妻と出会わなければ、今日この原稿を書くこともなかったでしょう。クチンの酒井さんや鍋嶋氏との出会いも偶然からでした。2008年インターネットで知り合い、その後保健省との折衝や幼稚園・小学校での歯科保健指導、植林活動など、彼らのお世話になりながら年3-4回のサラワク詣でを続けております。

私の国際協力活動は、20数年前に遡ります。1989年、厚生省は、自前の国際協力専門家を育てようと、国際厚生事業団に委託して「開発途上国派遣専門家研修」を開始します。私はその第1期生として、医師2名、薬剤師1名とともに5ヶ月に及ぶ研修を受けることとなります。歯科医師は1名で、しかも開業医がこのような研修を受けることに意味があるのか訝る声もあったようですが、それまでの私の経歴と何よりも厚生省歯科衛生課の宮武課長の推薦が効いたのではないかと考えています。歯科衛生課も国際化の波に遅れまいと必死でした。研修が終わると早速、1990年にはWHO・WPROの要請で

た。大学ではなく農村で、そして教授ではなく地域の住民が私にとっての先生でした。1960年代の日本は、高度経済成長の最中で国中が明るい未来を信じて懸命に働いていました。何もかも経済優先で新幹線や高速道路の建設、東京オリンピックや大阪万博の開催が日本人皆の努力の成果であり、先進国の仲間入りの象徴でした。

一方で、水俣病やイタイイタイ病、四日市喘息などの公害病が全国各地で発生していました。子どものむし歯が多発したのもこの時期でした。信州の田舎に開業した私は、押し寄せる子供たちのむし歯に押しつぶされそうでした。夜になるとスライドを持って公民館に出かけて、むし歯予防について親たちと膝を交えて話しました。3歳児のむし歯のピークは1969年で、73年のオイルショック以後にようやく沈静化していきます。当時のお中元の花形は乳酸飲料でした。ちょうどテレビや洗濯機、冷蔵庫が普及し始めて、戦中戦後の貧しさの中で甘いものを我慢していた親や祖父母の世代は子供におやつをたらふく与えることで満足感を感じていました。

オイルショックの後、人々は健

康とは何か、幸せとは何かということによりやく気づき始めます。公害病の訴訟や環境保護の意識が高まりました。実は、子どものむし歯が減少した理由として3歳児健診の前に1歳6か月児健診が導入されたこと、乳幼児の医療費無料化、保健指導料の保険導入など制度上の改革が行われていったことを忘れてはなりません。乳幼児健診の後、会場にお菓子の袋や乳酸飲料の空き瓶が散乱していたのが、いつの間にかチリひとつなくなっていました。同時に子供のむし歯も減っていったのです。

今、アジアの国々では、かつて日本が歩んできた道を辿ろうとしています。私は子どものむし歯は彼らの育児環境のバロメーターだと考えています。サラワクの奥地



の村まで木材運び出しのための道路が開かれると、人々の生活は一変していきます。開発とは何か。道路や電気、車やバイクなど現地の人々が憧れる豊かさは、本当に人々の幸せにつながるのか。開発は人々の間に格差を生み、人間関係が壊れて行きます。子供たちのむし歯も増えていきます。彼らが先祖から受け継いできた自然と一体の健康的な生活は、先進国の人間が考える幻想に過ぎないのか。ソロモン諸島、カンボジア、ラオス、ミャンマーなどの国々で25年間、医療協力に関わってきて「国際協力とは、現地の人々とともに悩むこと」だと改めて自分自身に言い聞かせているこの頃です。

ホーチミンだより ~日本と似たとこ違うとこ~

ホーチミン市在住
田井 理紗

読者の皆様はじめまして。今年2月からベトナム・ホーチミンで暮らし始めた関係で、今回ダリクチンに寄稿させていただくことになりました。

私は、ACEワークキャンプ第1回の参加者です。もう7年も前のたった8日間の日程でしたが、今になっても時折キャンプの出来事を思い返しています。それほど印象的で、私の人生のなかで大切な位置を占める体験でした。またサラワクRCSブログなどでムヒバセンターが進化していく様子を見るたびに「私が行った時はまだデコポコの更地だったのになあ」と感慨に浸ると同時に、毎回素晴らしい成果を上げているワークキャンプの記念すべき第1回に参加できたことを誇らしく感じています。

さて今回は、私がホーチミン生活で感じた日本とベトナムの類似点と相違点について書いてみたいと思います。

「生活」とはいえ、まだ滞在数ヶ月の私に何が言えるか、と自分でも思います(笑)。ただ、この数ヶ月、地元の市場などに足繁く通い、現地人に溶け込む努力をしました。そんな日本人の、予断も多分に含んだ文章だということをご理解いただけると幸いです。

では、まずは類似点から。日々感じるのが、双方「英語が苦手」だということです。ホーチミンでは、観光地で旅行客が行くところであれば、英語のみならず日本語や韓国語ができる人々もたくさんいますが、少し観光地から離れるとほとんどの人が英語を操れません。単語は少し出てくるものの文にならない、「話せそうで話せない」感じまで多くの日本人とそっくりです。ベトナム在住の日本人はよく「タクシーの運転手ですら英語が通じない」と愚痴をこぼしますが、日本に来る外国人も、おそらく同じような居心地の悪さを

感じているのではないかな、と思うこの頃です。

次に「色白=美人」という点。もともと褐色系の肌を持つ人が多い南部の街ホーチミンですが、美白への憧れは相当なものようです。日本でも色白は美人の条件の一つだと思いますが、ベトナムでは顔立ちがかなりの美形であっても、肌が白くないと美人とは見做されないそうです。ですので、一年中30度を超えるホーチミンで、日中外出する女性の多くはパーカーなどの長袖を着て、長ズボン



穿いて、日焼け防止に励んで

でいます。人々にとって、多くの日本人は色白と言えるよう

ので、日本人女性には一歩有利な環境であると言えます。(笑)

最後に、「宗教の垣根を越えやすい文化」ということです。日本人もベトナム人も、大半は仏教を信仰していますが、他宗教に寛容と言えると思います。多くの食堂などの店先には、商売繁盛を祈念する仏壇がある一方、クリスマスの時期には一ヶ月前から街がクリスマス一色になります。普段、仏教の縁起物を買っているお店もクリスマスの飾りで埋め尽くされます。日本人だけではなかったかと親近感が湧いてきます。ベトナムにも日本と同じように土着の神話がたくさんあると伺いました。

それも要因のひとつかもしれません。

一方、相違点もたくさんあります。ひとつは衛生観念の差です。ベトナムでは人通りの多い路上で地べたに昼ごはんを置いて食べている人をよく見かけます。食堂の食器は汚いし、市場の肉売り場では、多くの人が肉を直に触って品定めします。結構、触ります。市場のものは新鮮だとベトナム人はいうけれど、あんなに触られていては…、とちょっと引いてしまいます。逆に日本人はやや清潔を好みすぎるくらいがありますので、「多少の汚さは別に大丈夫かも」と、勉強になります(笑)。

もうひとつは社会格差です。日本も最早格差社会だと思われるでしょうが、やはりレベルが違うように思います。富裕層がタブレット端末を持ち、外国人向けの高級サービスを受ける一方で、道端に職のない人が座り込んだり、宝くじ(国営会社発行)を生活の窮状を訴えながら売り歩く人がいたり物乞いの人がいたり。若者の中でも、大学卒業後にビジネススクー

ルや語学学校に行ったりして、より良い職を得る機会を持つ人がいれば、20代の段階で、今後のスキルアップが難しい警備員やドライバーのような職に就く人もたくさんいます。所得の差で、受ける教育や人生の選択肢にとっても大きな開きがある状況です。平均年齢27歳の若い国ベトナム。低所得者層の若者の可能性がもっと広がれば国としても更に成長できるのではないかと、来たばかりのよそ者ながら感じてしまいます。いかがでしたでしょうか。外国に暮らすことは日本を再発見することでもあります。折角なのでこの機会を存分に楽しもうと思っています。



市内交通はバイクが主役

“Satu Malaysia” (マレーシアは一つ)

中澤 和代



街中に立つ“Satu Malaysia”

今、街のあちこちに目立って、“Satu Malaysia”の立体的な看板が立っている。すでに告示されている統一選挙(国会議員)への意味づけかもしれない。筆者がこの言葉を意識するようになったのは4,5年前であったように思う。このところ、「マレーシア国の強力な意思」の現れとも言えるこの表現と、大衆のスピリッツについて考えることが多いので、今号は“Satu Malaysia”の身近な出来事をお伝えしようと思う。

マレーシアは、東南アジアのマレー半島部分とボルネオ島西北部を領域とする連邦立憲君主制国家であり、国王は13州のうち9州にいるスルタン(首長)による任期は5年の輪番制。内閣の補佐を受けて行政を担当する世界でも珍しい形の国王制である。このマレーシアは多民族複合国家で、全体的には、人口の6割をマレー系、3割が中国系、1割がインド系ということになっているが、今、私が住んでいるサラワク州になると、この割合が変わり、マレー系、中国系の他、イバン、ピダユー、カヤン、ウルなどの少数民族が多く、インド系は非常に少ないと言われている。少数民族の中では、イバン族が最も多く、全体の60%を占めており、政治的にもきちんと関わっているのが特徴である。いずれにしても多民族で、「言語、習慣、服装、肌の色も異なるそれぞれを認め合い、みんなで一丸になって仲良くしていきましょう」というのが“Satu Malaysia”(マ

レーシアは一つ)という概念である。Webで検索するとすぐヒットする。この国は独立後、昨年で55年目(1957年に独立国となる)を迎えているが、独立後10年前後に激しい民族間対立があったとも聞くから、その教訓から出てきた理念なのかもしれない。どこの国でも国歌が提唱する理念はあるが、どれだけ、国民の間に浸透し、普段の暮らしの中に生かされているかが注

目点だ。政策が商売かわからないけれど、“Satu Malaysia”という歌があり、是非、お試しください。また、至るところに看板があり、説明がある。Tシャツも普通に売っている。当然、私たちのロングハウスにも数字の「1」の中に、マレーシア国旗をデザインした看板や横断幕が至る所に飾ってあるし、車からみる道路の端々にもそれは存在する。

ある日、福祉局からの連絡があった。街の近くにあるたった1つの身寄りのない婦人が入る老人ホームでSarawak州の知事の奥さんや福祉局のトップが主催するイベントがあり、そこで作品の即売会をしたいとのこと。スタッフとメンバー、私たちは作品を選び、出かけていった。偉い人のイベントが中心で、即売会としては、あまり楽しくはなかったが、そこには、若い訓練兵も招待されており、イベントの終わりが近づくと彼らが道路両側に並び、歯切れ良く、リズムカルに何かを合唱し、その声に合わせて、会場のみんなも福祉局の職員も半ば、踊るように声を合わせ、手を叩いている。メンバーも笑顔で楽しんでいる。その言葉の最後に確かに「ありがとうハイ！」と聞こえた。日本人は、私たち二人だけなのに…?側にいた若いスタッフにこれはなに?と聞くと“Satu Malaysia”だということ。このフレーズは、各民族の「ありがとう」という言葉を集めたもの。軍隊だけではなく、学校でしばしば合唱するそうだ。そして彼女

は教えてくれた。ちなみにバンバンというのは手を叩く音。幸せなら手をたたこ、バンバンと同じ。

☆☆☆☆☆

Terima Kasih	バンバン	
(テリマカシ)		マレー語
Thank You	バンバン	
(サンキュウ)		英語
She-She	バンバン	
(シェ シェ)	謝謝	中国語
Nandri	バンバン	
(ナンドレー)		タミール語
Sukran	バンバン	
(スークラン)		ヒンディー語
Arigato	hai	
(手を叩くかわりにハイと言う)		
アリガトウ		日本語

☆☆☆☆☆

うーん、なるほど…。白国の民族だけではなく、外国人も含めてひとつのマレーシアなんだ…。あまりにも想像外だったし、外国で彼らの口から思いがけず日本語を聞くと嬉しくなる。それから私は全フレーズを覚え、何かある度、ロザさむ。お鈍子ものの私は、いつか内緒でインターネットにヒットしたマレー語の“Satu Malaysia”の歌も覚えて、ロングハウスの舞台上で歌ってみたい。きっとみんなから拍手をもらえるに違いない。

選挙は、5月5日である。“Satu Malaysia”私たちに近い人々がどの政党を支持するのか知らないけれど、みんなが仲良くすることは素晴らしい!どこの国でも、政治家は対立を産む政治ではなく、協調を育む政治をしてほしい。

それでは、みな様

「ありがとう・ハイ!」



みんなで、リズムカルに手をたたく

ACSだより



赤ちゃんを抱くディアナさん

昨年度は、2度ペナンACSを訪問する機会に恵まれた。それまでの約8年間、私はACSを訪問することはなかったのが、特に感ずることが多々あった。一言で、表現すると「成熟」という言葉になる。活動内容も作品も、メンバーの顔つきはもちろん、外(社会)とのつながりも、全てが大人になったようで、ポリシーを感ずることができた。先ず、ステップング・スー

ACS訪問記 中澤 和代

ンの活動の全てが社会的、芸術的であること。外部の人との関係によってさらなるステップを踏んでいる。製品も多く、注文により、作られているし、絵画なども芸術の域に入り、メンバーの作品がアートとして出品されたり、織物も予約があり、素晴らしい。これはメンバーの感性が素晴らしいの言うまでもないが、中心にいるアイナさんの人間関係によるところも大きく、10月まで、いてくれた内海明美さんの努力も大いにあったのだと思う。

私が知っている10年前のメンバーの本人活動は、かなりぎこちないものであったが、今や、マレーシアの指導的立場にあり、彼らは他の地域から呼ばれることも多いと聞く。そして、本人活動のリーダー的存在であって、その後、結婚されたディアナさんには赤ちゃんが生まれた。まさにステップ

グ・ストーンのメンバーひとり一人は、それぞれの人生を生きている。

ファースト・ステップには、変わらず意欲的で優しいアメリカ人のテリーさんが障害児の母子通園をサポートしていたし、USM(大学)で勉強を続けるスーフンさんは、インクルージョン教育を街の幼稚園で行い、ファースト・ステップにもよく顔を見せてくれる。またファースト・ステップの隣に位置するレスパイトの家では、その空き室を利用した絵画教室や手芸教室があり、地域の主婦が毎日、訪れ、賑やかである。

こうして、成熟したACSを見てみると、ムヒバセンターは、まだまだ若い。これから！というところを学ばせてもらった。やはり、ACSはRCSのお兄さんお姉さんである。ムヒバセンターも地域性を生かしつつみんなで後を追いかけてよう。



RCSはいま

新メンバー紹介・その他 中澤 健

「ムヒバ」が有名になってきたのだろうか。かなり遠くからスタッフになりたいと履歴書を送ってきて、自分は看護師だが子どもの世話も出来るなどと売り込んでくる。利用者が離れたところからの希望者が来る。家族や親戚の人が相談に来る。そんな時、地域的に可能であればスタッフがみんなで本人に面接に行く。会ってしまえば少々遠くても断ることは出来ない。そんな訳で、毎日は無理だが利用者は全部で17人になった。

最近、加わった二人を簡単に紹介しよう。先ず、17歳男性、バリくん。家族は、お祖母ちゃんだけ。学校に行ったことはなく、CPで歩けなく、言葉もないが、膝で移動し、何でもする。ロングハウスに隣接した家で暮らしている。仲間が出来て嬉しそう。笑顔の多

い彼はみんなに好かれている。週2回しか来れないのは残念だが彼に何をどう提供するか、スタッフで相談中。もうひとり、1ヶ月前から加わったナターシャは14歳の女の子。彼女もCPで歩行不能。スタッフがいろいろと試みるが、今のところ反応がない。でも、この場に慣れ、仲間の優しさに触れながら、「ムヒバ」を楽しむようになるに違いないと思う。

伝えたいことはまだまだある。3月半ば、「損保ジャパン」のご厚意で厨房にステンレスの食器庫、冷凍・冷蔵庫等が設置され、食品をネズミに食べられたり衛生の心配がなくなった。4月半ばには長野県の歯科医・村居正雄さんが来られ、全員の歯科検診をして下さった。シブの歯科ナース・ハリマさんが、快く来て協力して



バリ

ナターシャ



村居氏とSibuの歯科看護師

下さいました。

RCSIは、カピットのトイポットも始めたが、いずれご報告したい。

セダップ! クッキング in マレーシア

KL在住 佐藤 英代

老黄瓜スープ



体によくておいしそうなスープ

マレーシアに住んで13年、親戚や友人に聞いて作れるマレーシア料理も増えてきました。

今日は日本人にもできる漢方素材を使った「老黄瓜スープ」を紹介します。まず、老黄瓜って何？ですよね。英語だとOld Cucumber元々はマレーシアの大きめの薄グリーンのきゅうりと同じで収穫せずにそのまま3か月生らしておく

と、外見が茶色のきゅうり、老黄瓜になるとか…。マレーシアのマーケット、スーパーなどで売っています。味は冬瓜に近いです。日本の皆さんは冬瓜で代用して下さい。このスープに入れるなつめは簡単に手に入る漢方素材です。胃腸機能の調整、滋養強壮などに加え、精神安定、血行を良くする働きがあります。体力、気力ともに補ってくれる食材です。

材料 (4人分)

老黄瓜 (冬瓜) 1本
豚スペアリブ 200g
なつめ 6,7個
塩 少々



こんな風に

1、老黄瓜の両端を切る。煮崩れを防ぐ為、皮を端から端まで縦にむくところ、むかないところを作る。(写真参考)2センチ等間隔の輪切りにする。それをまた半分

りに、半月切りにする。中の種をスプーンで取り除く。

2、鍋に水1700mlを入れる。水の状態で、切った老黄瓜、豚肉、なつめ、塩少々を入れ、火をつける。沸騰するまで強火。沸騰したらあくをとり、弱火で2時間煮込む。水の量が少なくなったら、水を加える。最後に味を確認し、味が薄ければ、塩を加える。

二日酔いの人、胃腸の具合が良

くない人には是非、このスープ。飲んだ後、すっきりとします。胃腸の働きをよくする、なつめのおかげでしょう。もちろん、味も日本人好み。1回作ったら、はまる美味しさです。なつめのない方は、和風だしで煮出してもおいしくできます。是非、試してください。

ACEの通常総会は、6月15日(土)午後1:40分~7:15分です。今回は、石井哲夫先生と浅野史郎教授に「人生の扉を開く」の題でご講演いただきます。会員、非会員を問わず参加費2,500円です。場所は、東京・南青山会館(地下鉄表参道B3出口から徒歩4分)。お申し込みは事務局迄。

ACEに入会のお誘い

*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているペナンのACSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

編集後記

・創刊後以来、最終頁に連載して下さった「じゃらんじゃらんちやりかわん」の上杉誠さんは、病氣療養中で今号はお休みです。年内に復帰される予定です。急遽、お願いしたにもかかわらず、KLの藤英代さんが快く「セダップ! クッキング in マレーシア」を書いてくださいました。他にも、海外で活動されている方々の記事が掲載でき嬉しく思っています。(Kazuyo)

・“Dari Perang”以来、本紙をマレーシアの美しい記念切手で送りたいと心がけ、努力してきました。ところが、小都市シブではどうしても手に入らず、クチンまで泊まりがけで買いに行ったりしましたが、ついにその余裕もなくなり、今号は、普通切手でお送りせざるを得なくなりました。でも、美しい花の切手を選びました。総会でお会いできれば嬉しいです。(Ken)